

聖書：マタイ 28：1～15

説教題：足を抱き、イエスを拝し

日時：2020年10月11日（朝拝）

「さて、安息日が終わって週の初めの日の～」とマタイの福音書の最終章は始まります。この「週の初めの日」という言葉はキリスト教会にとって特別の意味を持つ言葉です。それはこの日にイエス・キリストは復活したからです。4つの福音書とも、イエス様の復活を記す段になって初めて「週の初めの日」という言葉を使っています。マタイの福音書最終章の28章、マルコの福音書最終章の16章、ルカの福音書最終章の24章、そしてヨハネの福音書20章。これらを見比べることによっても、いかにこの言葉が特別な意味を持っているかが分かります。そしてこのことが今日、新約の教会が日曜日に集まって礼拝をささげていることの根拠になっています。

さてここに登場する女たちはまだこの日の意義を知りません。ユダヤでは日没から日付が変わりますから、安息日が終わって週の初めの日が始まったのは今日で言う土曜日の晩でした。しかし暗くなったその時間から墓に出かけるのは適切ではありません。そこで明け方早く出発します。そこで彼女たちは驚くべき出来事を体験します。

まず彼女たちの前で起こったことは、主の使いの現れと告知です。2節に「すると見よ、大きな地震が起こった」とあります。この地震は、続く言葉から、主の使いが天から降りて来て、墓の入口の石を転がしたことによること、そしてその上に座ったことによることが分かります。その御使いは3節に「その姿は稲妻のようで、衣は雪のように白かった」とあります。この異常な光を放つ超自然的存在を目の当たりにして番兵たちは震え上がり、死人のようになります。しかし御使いは女たちに言います。「あなたがたは、恐れることはありません」と。

主の使いは続けて言います。「あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのは分かっています。ここにはおられません。なぜならよみがえられたからです！」と。「よみがえられた」という言葉は、原文では受身形で書かれています。つまりよみがえらされた。父なる神によってということです。イエス様のよみがえりは、このようにご自分の力でなされたことではなく、父なる神によるみわざとして聖書で語られています。この復活について主の使いは「主が前から言っておられたように」と付け加えます。こ

それは決して突然起こった出来事ではありませんでした。このことについてイエス様は繰り返し予告されていました。たとえばピリポ・カイサリアでペテロが信仰告白した後、イエス様は初めて弟子たちに受難予告をされましたが、その時、こうっておられました。16章21節：「そのときからイエスは、ご自分がエルサレムに行って、長老たち、祭司長たち、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならないことを、弟子たちに示し始められた。」 これはこの後に繰り返された受難予告においてもそうです。マタイの福音書には合計3回、主が受難を予告された言葉がありますが、いずれの場合も、セットで3日後の復活のことも語られています。それらの言葉はこの時まで弟子たちにとっても、女たちにとっても良く意味の分からないぼんやりとしたものでしかなかったのでしょうか。主の使いは「その通りに主によみがえられました。ですからここにはおられません。さあ、納められていた場所を見なさい。」と彼女たちに、墓の中が空であることを示します。

ここまでのやり取りから分かることは、イエス様はこの時に復活したのではなかったということです。天使が墓の石を転がしたのはイエス様を外に出すためではなく、女たちに空の墓を見せるためでした。するとどうということになるでしょう。イエス様は墓の入口が閉まった状態で、すでに女たちが来る前に復活し、墓の外に出ていたということでしょうか。そういうことになります。でも一体どうやって閉じた墓から外に出ることができたのでしょうか。私たちの理解を超えることですが、復活後のイエス様のからだは、それが可能だったことが聖書の他の箇所からも分かります。この日の夕方、弟子たちが集まっていた部屋には鍵をかけられていたのに、イエス様は突然彼らの真ん中に立ってご自身を現されたという記事が他の福音書にあります。またその少し前にエマオという村に向かう二人の弟子とイエス様は一緒に歩き、道々聖書を説き明かされ、夕食時に彼らが「イエス様だ」と分かった瞬間に見えなくなったと書いてあります。

主の使いは女たちに「急いで行って、弟子たちに伝えなさい」と言います。つまり彼女たちは弟子たちより先にこの主の復活の知らせを受けたということです。彼女たちはこのニュースを自分たちのところで止めておいてはなりません。急いで伝えなさいと言われます。イエス様が死人の中からよみがえったこと、そしてあなたがたより先にガリラヤに行くということ。この「先にガリラヤに行く」ことについても、すでに言われていました。26章32節：「しかしわたしは、よみがえった後、あなたがたより先にガリラヤへ行きます。」 そこで彼女たちは恐ろしくはあったが、大いに喜んで、急いで墓

から立ち去り、弟子たちに知らせようと走って行きます。

そんな彼女たちにさらに驚くべきことが起こります。二つ目に見るのは何と復活したイエス様ご自身が彼女たちに現れたことです。彼女たちは墓が空であることを見ましたが、それだけでは十分ではありません。イエス様はよみがえったというニュースを伝える彼女たちに、イエス様ご自身が現れてくださいました。そして「おはよう」と言われました。もう少し何か特別な言葉はなかったものかとも思いますが、かえってこれが良いのでしょうか。いつもと同じようにしてイエス様は彼女たちの前にご自身を現してくださいました。彼女たちは近寄ってその足を抱いたとあります。この「足を抱く」という動作は、普通王様に対する尊敬や服従の心を表すものだったようです。彼女たちはイエス様を再び取り戻すことができ、言葉には言い表せない喜びで心が一杯だったでしょう。しかしただ嬉しくてそうしたのだけでなく、今やイエス様を新しい目で見ているのです。その後には「イエスを拝した」とあります。つまりイエス様を礼拝した。彼女たちはイエス様を今や人間以上の方として見たのです。あのむごたらしい十字架刑を受けながら、それを乗り越えて、今このようにして自分たちの前に立っている方を。今や死の力を打ち破って永遠のいのちの世界をもたらした方としてです。

イエス様は彼女たちに「恐れることはありません」と言われます。そして先に主の使いが言ったのとはほぼ同じ言葉を繰り返されます。そんな中、注目に値するのはイエス様が弟子たちのことをここで「わたしの兄弟たち」と言い換えられたことです。弟子たちはイエス様が敵の手に渡されるや否や、イエス様を見捨てて一斉に散り散りバラバラに逃げて行ったのに、イエス様はそんな彼らを赦し、ここでなお「わたしの兄弟たち」と呼んでくださっています。その彼らに「ガリラヤに行くように言いなさい」と言われます。ある人はなぜガリラヤなのかと思うかもしれませんが。他の福音書を見ると、イエス様はこの復活した日曜日の当日にエルサレムにいた弟子たちにご自身を現された記事が出て来ます。それではイエス様に会うためにガリラヤに行く必要はないではないか。マタイの福音書のこの記事と他の福音書の記事には矛盾があるのかと思うかもしれませんが。しかしそうではないのです。ただマタイの福音書は、このガリラヤ行きに特別な関心を持っているということです。そのことは次回見る 16 節に少し目をやると分かります。マタイの福音書の最後の記事となるいわゆる大宣教命令は、ガリラヤで与えられます。この書のクライマックスはガリラヤでのイエス様の言葉になっています。なぜそうなのでしょう。それはこの福音書 4 章 12～17 節の記事と関係します。イエス様は

荒野における悪魔の誘惑を受けた後、ガリラヤへ行き、そこで宣教を開始されました。そしてそれはイザヤ書の次の預言が成就するためだったとされています。「ゼブルンの地とナフタリの地、海沿いの道、ヨルダンの川向こう、異邦人のガリラヤ。闇の中に住んでいた民は大きな光を見る。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が昇る。」普通私たちの考えで言うなら、福音はまずイスラエルの宗教の中心地エルサレムから発信されると考えるのではないのでしょうか。ガリラヤなどは本来見向きもされない地域です。過去のアッシリヤ捕囚などを経て、この地域には異邦人の血も混ざり、「異邦人のガリラヤ」と呼ばれて軽蔑されていました。エルサレムから見たら霊的な暗黒の地です。しかしそういう絶望の深いところにも福音の光は届く！とイザヤ書は預言していました。その御言葉に従ってイエス様はガリラヤから宣教をスタートされました。そしてそのガリラヤで、この福音書のクライマックスとなる大宣教命令は語られるのです。これはこの福音があらゆる人々に向けられていること、どんな暗闇の中に座っている人にも向けられていること、深い落胆と失意の中にある人も差し向けられていることを明らかにします。主が勝ち取り、これから宣べ伝えるようにと命じる福音は、そのようなすべての人に向けられた「恵み」に満ちた福音なのです。そのことは復活の証人として、ここで女性たちが用いられていることにも表されていると言えるかもしれません。当時、女性たちの証言はまともに受け止めてはもらえませんでした。そんな世界の中で、女性たちがこの重要な役割を担っています。これは福音が示す世界を現しています。キリスト・イエスにあってはユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もないという世界観が示されています。女たちはこの神のご計画が明らかにされる場所としてのガリラヤに行くように！と弟子たちに伝えるべく、イエス様によって遣わされたのです。

さて、このイエス様の墓で起こった出来事は祭司長たちにとって当惑する出来事以外の何物でもありませんでした。番兵たちの報告を聞いた後、彼らは長老たちとともに集まって協議します。そして兵士たちに「弟子たちが夜やって来て、われわれが眠っている間にイエスを盗んで行った」と言いなさいと言います。兵士たちにとって「眠っていた」などと証言することは職務怠慢を意味し、自らのいのちを危険にさらすこととなりますが、所詮どうにもならないと判断したのでしょう。引き換えに多額のお金をもらえらばと承諾します。それにしてもこれはあまりに皮肉的な内容です。前回見た 27 章最後の部分では、弟子たちがイエス様のからだを盗み出して、イエスはよみがえった！とすることがないようにとこの策を講じたのに、ここではイエスの弟子たちが盗み出したと言え！と本来阻止しようとしたまさにそのことを宣伝せよと言っています。そ

してよく考えると、この説明はおかしなものです。もし眠っていたなら、どうして盗んだのは弟子たちだと分かるのでしょうか。誰かが目をあけてそれを見ていたのでしょうか。ではもし目をあけて見ていたならどうしてその動きを阻止できなかったのでしょうか。これも答えるのが苦しくなります。これは前回の 27 章最後の部分とセットで、ここを読む者にある種の笑いを与えるものでしょう。詩篇 2 篇 4 節：「天の御座に着いておられる方は笑い、主はその者どもを嘲られる。」

以上、主が復活された週の初めの日の記事について読みました。この日に神は驚くべき、素晴らしいことをしてくださいました。イエス様は敵の手に捕らえられ、金曜日に十字架につけられ、そこで息を引き取ってすべてが終わりだったのでしょうか。そして墓に納められてすべてが終わりだったのでしょうか。そうではありませんでした！この週の初めの日に神はすべてを引っ繰り返されました。人間が行った地上的判決をすべて引っ繰り返されました。これは突然起こったことではなく、前から繰り返す予告されて来たことでした。そして何と言ってもここにおいて死が終わりではないという世界が開かれました。すべては死によって終わりにさせられると私たちは普段考えていますが、——たとえどんなに地上で楽しく素敵に過ごしても、死んでしまったらどうにもならない。死の力の前に黙って服すしかないと私たちは考えていますが、——死が最終勝利者ではないこと、いのちがこれに打ち勝つという世界をイエス様はもたらしてくださいました。私たちはこのあまりにも信じがたい出来事を前にして口ごもらざるを得ません。人間の言葉では十分に表現できません。しかしそのような私たちの言葉では言い表しきれない、あまりにも素晴らしい救いの日を神は約束に従ってついに来たらせてくださいました。

そんな私たちにとって週の初めの日ごとにすべきことは、今日の箇所に出て来た女たちのように、イエス様の足もとにひれ伏して礼拝をささげることではないでしょうか。ここに死に打ち勝った方がおられます。イエス様は私たちの罪を背負って死なれ、またそのようなお方として復活されました。ですからこれはイエス様の十字架の死は私のためになされたものだと信じ、より頼む者すべてを、このような復活の祝福に生かしてくださるということを示すものに他なりません。私たちはこの世にあって様々な悲しみを経験します。自分の罪から来る悲しみもあれば、他の人の罪から来る悲しみもあります。その中で私たちは苦しみ、うめき、叫び、時に絶望したくなる状況に至る時もあります。しかしたとえ私たちの生活に十字架の死のような出来事が起こったとしても、それが最

後ではないことをこのマタイ 28 章は示しています。それらの悲しみや死を凌駕するいのちの世界がここに 있습니다。それを私たちのために勝ち取ってくださった方がここに立っておられます。私たちもその方を私たちの主として週の初めの日ごとに仰いで、その方の前にひれ伏し、恐れと喜びの礼拝をささげる者でありたいと思います。そしてその主によって遣わされたいと思います。ここでも女たちは弟子たちに告げよ！と言われました。そして次回見る通り、弟子たちはすべての人に伝えるようにと言われます。暗闇と死の陰の地に座っているどんな人にも、この恵みは差し出されています。私たちは週の初めの日が巡って来るたびに、この恵みを覚えて主を礼拝する喜びに生きる者とされたいと思います。そしてこの素晴らしい福音を宣べ伝える光栄な使命に、主によって遣わされ、用いられるしもべたちの幸いに生かされて行きたいと思います。